

無人航空機で測量実験

メリットや課題調査

小型の無人航空機「ドローン」を土木工事現場で活用する実験が二十五日、岐阜市今嶺の長良川河川敷であった。建設業者ら八十人が実際の機能を確認しながら、ドローン活用のメリットや課題を話し合った。(鈴木凜平)

使用したドローンは全長九メートルからの映像を地上で見ながら十秒ほどで、四方にプロペラを回し、リモコンで操作する。が付いている。搭載したカメラ。実験では、河川敷で工事を



ドローンを使った測量実験をする建設業者ら。岐阜市今嶺の長良川河川敷で

岐阜の建設業者ら

行っている市川工務店(岐阜市)と、ドローンを保有する日創建(名古屋)などが協力し、縦九十センチ、横四百センチの工事現場を測量した。ドローンを使って二十分間で撮影した二百枚の画像を合成することで正確な測量ができ、従来の測量方法で二日間かかる作業を大幅に短縮できることが分かった。

このほか、立ち入りが難しい中州でも、堆積した土砂の量を計測できることを確認。ただ、「空撮による測量では、草が生えているところは難しいのでは」といった指摘も出ていた。市川工務店建設管理部の宇田和宏部長(五十)は「上昇気流に弱いなど課題もあるが、土木の現場では、危険な場所を早く発見するなど立体的に状況を把握できるメリットは大きい。今後検証を重ねて実用化していきたい」と話していた。